

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会  
2020年8月20日  
文責：JUN

## オンライン例会がもたらした学びつながる喜び

8月8日、コロナ禍でそれまで実施できないでいた本年度第1回の例会を行いました。とは言っても、いつものように会場に集まるのではなく、自宅であったり学校であったり、参加者がそれぞれ異なる場所にいてそれをラインでつなぐ「オンライン例会」として行ったのです。

私たちの会が、どういうことからオンラインで例会を行うことにしたのか、そして、それがどういうものになり、参加した人にどういう思いをもたらしたのか、そして、オンラインにどのような可能性を見出したのか、興奮さめやらぬ内に、ここでふり返っておこうと思います。

### 1. オンライン例会構想が生まれるまで

もちろんのことですが、例会をオンラインで行ったのは初めてでした。コロナ禍のこの状況になるまで考えもしないことだったからです。実は、この日の例会も、会場使用の申し込みをし、プログラムも決め、参加申し込みの受付も行っていったのです。

3密を避けなければならないということから、いつもより広い会議室をとり、参加者数にも制限を設け参加を募りました。そして申し込み数が40人近くになった7月下旬でした。東京都でコロナウイルスの感染者が急増し、またたく間にそれが各地に拡大していきました。もちろん東海地方も例外ではありません。状況が一気に悪化したのです。

例会はしないほうがよい、事務局でそう判断しました。けれども、本年度に入ってもう4か月も例会を行っていないのです。みんな、例会に飢えている、そういう雰囲気が漂っていました。

この4か月、事務局員だけの集まりも持っていませんでした。けれども、本年度の活動をどうするかという相談は必須です。そこで、オンラインで事務局会議を行ったのです。F大学のK先生から勧められていたことも頭にあったからです。やってみて感じたのは特に難しいことはないということでした。それ以上に、久しぶりに顔を見ることができたうれしさにだれもが包まれました。そのとき、「直接向き合わないで機械を媒介としたオンラインなんて」という先入観は消えていました。

ですから、例会中止を決めたとき、その「オンライン」が代替案として浮上したのです。そうだ、オンラインでやれば、だれもが安心して参加できる、もちろん会場における会のようにはいかないことはあるだろう、けれども、今は、安心と安全が優先されるべき、こうして8月例会を「オンライン例会」にすることが決まったのです。

ではどういう内容の例会にするか、そう考え始めたとき、オンラインのシステムの中に備わっている「ブレイクアウトルーム」機能を使って、グループにしてみてもという考えが事務局のSさんから飛び出したのです。このルームのことは旧知のMさんから情報をもらっていて、「学びのたより」前号でも少し触れていましたが、まさかここで実現することになるとは考えもしないことでした。

参加される皆さんは、今、コロナ禍で何を大切に、どういう授業をするべきか、その手がかりを求めている、だから、まずは、その要望に応える講演を行おう、そして、その講演を行ったうえで、参加者を4人グループに分けて、グループ協議をしてもらおう、そうすれば、だれもが、さまざまなことを忌憚なく語り合い聴き合うことができるのではないかと、そう考えたのです。

私たちは、グループをするということがどれほど大切であるか、それはわかっていました。これまで取り組んできた子どもたちの「学び合う学び」において、グループの学びは必須だったからです。しかし、オンラインでできるのだろうか、対話になるのだろうか、グループにわかれるときかなりの時間的ロスが出るのではないだろうか、皆さんが戸惑うのではないだろうか、そういう懸念を抱いていました。やったことがないのでからこの心配は当然のことでした。しかし、今後、子どもたちを対象とする「オンライン授業」を双方向性のものにしていくためにも、まずは私たち自身やってみないといけない、それには絶好のチャンスだと考えたのです。

講演をすることになった私は、講演内容についてあれこれと考えていきました。最初は、ZOOMのシステムは40分ごとに切れるということから、私の講演も途中で切れて入室し直してもらうという2段階構えで計画しました。しかし、それでは、私の講演だけでなく、会全体が何度も切れることになりそのたびに時間的ロスが発生する、それは進行上好ましいことではありません。そんなとき、年間契約すればそういうことはなくなるということに事務局のNさんが気づき、急いで契約をしたのでした。

こうして私の講演に当初の予定より20分多い80分の時間を割けることになりました。そのとき、私に一つの考えがひらめきました。まずはタイトル通りの「感染症対策下における〈学び合う学び〉の実現」の話を聴いてもらい、その後、一つの詩を提示して、皆さんに生徒のようになってもらって詩の授業のようなことをやってみよう。前半の話で、教え込みの一斉指導型ではなく、子どもが考え子どもが探究し発見する学びにする大切さを語るのので、それを受けて、詩の読みにおいて、参加された皆さんが自ら読み、考え、発見する学びを体験するということが意味のあることではないかと思ったからです。それにはテキストにする詩にその場で出会ってもらう必要があります、と言ってオンラインではその場で配付するわけにもいかず、結局一人ひとりに「開封しないで」と記した印刷物を郵送したのでした。後からわかったことですが、このことがかえって皆さんの興味をそそったようでした。

しかし、私の講演イメージはそれだけで完了にはなりません。ここでもブレイクアウトルーム機能を活用したグループを入れてみてはと思いついたのです。そうすれば、参加されただれもが言葉を話し、聴き合い、そして読みを学び合うことができるにちがいないと思ったからです。

こうして、例会の進行計画は構築できました。そして、「オンライン例会」に変更したこと、その内容はこのようなものであること、オンライン例会に入室するためにはどうすればよいのか、それらを説明した案内を発信したのです。

そのときでした。ふっとある考えが、またまたひらめいたのです。それは、普段の例会には参加しづらい遠くの人にこのことを連絡してみたらどうだろうかということでした。

直接会場に来なくてよいのです。それなら遠隔

13:00～13:30	入室・自己紹介
13:30～13:40	開会の挨拶・会議の進め方説明
13:40～15:10	講演 ・「感染症対策下における〈学び合う学び〉の実現」 ・詩を味わおう（グループ2回）
15:20～15:45	講演を受けての協議（グループ）
15:45～16:25	学んだこと、考えたことの協議 （全体協議）
16:25～16:30	閉会の挨拶・事務連絡

の地の人でも参加していただける、そうだ、そのチャンスを生かさない手はない。こうして、かつて私たちの会とかかわりのある人、セミナーでのつながりのある人に連絡をしてみたのです。例会の2日前、参加者数は70名にもなりました。東北の方や沖縄の方まで参加を希望してくださったからです。それはなんともうれしいことでした。

こうして例会当日を迎えたのですが、もう一つ記しておきたいことがあります。それは、「オンライン例会」を行うには、ICTに堪能なスタッフがなんとしても必要だということです。私たちの会の場合、それはTさんでした。事務局会議を最初に行ったときから、この日の例会まで、私はすべてTさんに頼りっぱなしでした。そのTさんにSさん、Kさんが協働し、寸分の落ちもない計画通りの進行をしてくれたのです。

## 2. 私のところに届いたメッセージをもとに

例会は、参加者の皆さんに何をもちたのでしょうか。それは、例会の後、私のところに届いたメッセージに如実に表れていました。

### Aさん

昨日は本当にありがとうございました。

初めてお会いする遠くの先生方とお話することができたこと、他の地域の様子をお聞きできたこと、そして、本を読むだけではなかなか感じることでできなかった経験など、実りある時間を味わいました。

昨日のオンライン例会では、

- ①「部分、部分の読みをつなぐ」とはどういうことか(詩の授業から)
- ②「教え急ぐこと」と「深い学びへのいざない」との違い(算数の授業から)
- ③今、何をすべきか(「子どもたちにとってこの学年は二度とない」)
- ④学びを止めないという決心
- ⑤先生自身が楽しむこと
- ⑥もっと読みたい、もっと聞きたい、そういう世界を作るのが教師の役割
- ⑦子どもと子どもの間にある対話が重要である…

など、書き切れないほど多くの言葉が胸に響きました。

初めて出会う詩を初めて出会う人たちと一緒に味わうなんて、なんという贅沢な時間だったか！オンラインだからこそできることを経験できました。本当にありがとうございました。

この例会に参加された皆さんは、はっきりとした学ぶ意思を有して、強い期待を胸に申し込みをしてくださったのだ、Aさんのメッセージが、この日の参加者の皆さんの思いを代弁してくださっている、そう思いました。

箇条書きにされた7項目を目にし、私たちの例会で、こういう学びを生み出すことができたのだと思うと、Aさんをはじめとする参加された皆さんの熱意に頭が下がる思いがしました。

Aさんは、「オンラインだからこそできることを経験できた」と書いてくださっていて、それが、初めて出会う人たちと一緒に詩を味わったことだということなのですが、それは、他者とともに学ぶ醍醐味そのものだったのではないのでしょうか。

この詩の味わいについて、Bさんは次のようなメッセージをくださいました。

### Bさん

昨日は研修会に参加させていただきありがとうございました。地方にいるとなかなか学び合う学びの研修会には参加できにくいのですが、このような機会をいただいたことに深く感謝しております。〇〇県は一斉型の授業が多く見られますが、学び合う学びの素晴らしさに共感する先生もたくさんいます。△△小学校からもたくさん参加させていただきありがとうございました。

昨日の研修では「自己紹介」の詩を読んで自分が感じたことが多くの先生のお話を聞くことでどんどん変わっていくことを実感しました。自分でこの詩を読んでしまえば何か自分で感じておしまい、ということになるのかもしれませんが。他者の意見に耳を傾けることで自分では特に読み流していたところに注目したり、新たな発見をしたり、さらに読むこと自体が楽しくなったりするのを感じました。石井先生が言われる「読み味わう楽しさ、人と人、言葉と言葉がつながり合う素晴らしさ」を感じました。研修会が終わった後もこの詩のことを考えている自分がいます。

コロナ禍の中で一斉型の授業よりも学び合う学びがより多くのダメージを受けているように思いますが、今、目の前の子どもに何が大切なのかを考え工夫していきたいと思えます。

また参加させていただければ幸いです。ありがとうございました。

私は、講演の前半で、「学びのたより」前号で述べたような、「学習の遅れ」を取り戻すことだけを意識した教え込み一辺倒の一斉指導型にならないよう、子どもが考え、子どもが見つかる学びを目指してほしいということを語りました。そして、詩を読むときにそういう学び方を体験してもらおうと考えていたのですが、Bさんの文章を読んで、皆さんのおかげでそれに近いものになったのだと思い、よかったと胸をなでおろしました。それにしても、グループにおけるBさんの学び方は素晴らしいです。Bさんはまさに「学び合う学び」そのものを実践してくださったのです。

私は、前々から、子どもの立場に立たないと、本当の意味での「学び合う学び」はできないと言ってきました。学ぶのは子どもなので、その子どもの身になって学びを進めていかなければいけないからです。けれども、それは簡単なことではありません。子どもの側に身を置くということが簡単ではないだけでなく、その子どもは何人もいて、一人ひとり異なっているのですから、すべての子どもの立場に立つということは至難のことです。それでも、学ぶ子どもの側からの授業づくりを常に心がけていれば、次第に、子どもたちと息を合わせることができるようになっていくのです。そういう意味で、子どものように詩に向き合い、グループになって語り合ったことは、子どもの側から学びを考える上で意味のあることだったと言えます。

もうお一人、A4の用紙3枚もの長文の感想をくださったCさんは、オンラインの可能性、他の都道府県の状況から考えたことの2点とともに、次のような文章を書いてくださいました。

### Cさん

2点目は、石井先生の講義についてです。中でも詩の授業はたいへん貴重な体験となりました。以前、例会で話したことがあるかもしれませんが、私は国語の教師でありながら、国語の授業で繰り返し教材を読むことの意味がよく分かっていませんでした。そもそも私自身が小中学生時代に受けた授業でも、それほど何度も読み返すことはなかったので、あらすじがわかっただけならそれ以上読む必要はない、くらいに思っていました。もちろん今では、授業の中で繰り返し教材を読むこと、言葉と向き合うことの大切さは、それなりに理解しているつもりです。でも、今回の授業を受けたことで、より「納得」することができました。先生の授業で私が体験したことは次の通りです。

例会の日の少し前に石井先生からの手紙が届く。中を見ると「開封しないでください」と書かれたものと、先生からの手紙が入っている。こっそり開封してみようかという誘惑はあったものの、いやいや、と思い直し、先生の企画に乗っかる決意をする。

例会の日、いよいよ開封の時がくる。見てみると、知らない詩が書いてある。先生から「詩」と聞いたから詩なんだろうけど、いざ「自己紹介」というタイトルの文字の連なりそのものを見て、これは詩なのか？と不思議な気持ちになる。読んでみるものの1回では頭に入ってこない。2回読んでも読み取れない。どう読んだらよいのかもよく分からない。

何度か読み返しているところへグループの指示がある。グループ内の誰かが言った「これ、誰でしょうね？」の言葉を聞き、作者が分からないのは自分だけではないのか、とホッとする。たしかに…。これは誰の作品だろう？と本格的に探りながらまた読み返す。

「高齢で…」「言葉を生業としている…」「おそらく男性…」、自分の気づきとグループの気づきを重ねながらヒントを求めてまた読み返す。しかし、答えはない。ついに、誰かの「詩は理解しようとしたらダメなんですよ」の言葉をいいことに、作者は誰かと考えることは諦める。

気持ちを切り替え、改めて詩を眺める。おそらく他の3人も同じ。グループの4人がまたぼつりぼつりとつぶやく。「室内に直結の巨大な郵便受けってどんなの？」「過去の日付って何のこと？」「睡眠が快樂なのは私と一緒に」「仏壇も神棚もないってことは無宗教かしら」「こうして言葉にしてしまうと嘘くさい、ってところが気になる」。つぶやきの度に、皆、フムフムとその部分を読み返す。この人はどういう人なんだろう、どういう人生をおくってきたのだろう、どういう気持ちでこの詩を書いたんだろう。作者が誰なのかは分からない。でも、それはそれとして、この不思議な詩にどんどん引き込まれる。読んでは首を傾げ、唸っては読むことを繰り返す。これがまた楽しい。

出会ったばかりの、わずかにこれだけの文字を飽きることなく何度も読みたくなる。読むたびに発見がある。気づきがある。考えが変化する。一つ一つ慎重に言葉を読みながら言葉の向こうにあるものを思い描く。それが楽しくてたまらない。

これが、私にとってのすごい体験です。こんな読み方をしたのは初めてでした。子どもたちにもこんな体験をしてほしい、と心から思いました。

私は、このCさんの文章を読んで、深い感動に包まれました。それは、「教材である文章を何度も繰り返し読む」ことの大切さを、ご自分の体験で「納得」していかれたその経緯を、ご自分の中に生まれている事実を見つめながら、具体的に描き出すように書いてくださっていたからです。

授業において、テキストである文章を何度でも音読することが大切であるということは、学び合う学びに取り組んでいる教師ならだれもが耳にしていたことでしょう。しかし、それはどうしてなのか、

読みの質はどれだけ文章と出会ったかで決まるとは言われるものの、本当にそのことがわかっていたのだろうか、Cさんはそのことに誠実に向き合われたのです。

Cさんは、4つ折りされたプリントを空けた直後、「これは詩なのか？と不思議な気持ちになる。読んでみるものの1回では頭に入ってこない。2回読んでも読み取れない。どう読んだらよいのかもよく分からない」と感じたと書いておられます。それが、たった40分後には「出会ったばかりの、わずかにこれだけの文字を飽きることなく何度も読みたくなる。読むたびに発見がある。気づきがある。考えが変化する。一つ一つ慎重に言葉を読みながら言葉の向こうにあるものを想い描く。それが楽しくてたまらない」と変わっているのです。こうした思いの変化を引き起こしたのが、繰り返し読むこと、グループの他者と語り合い聴き合うことだったのです。

私は、この「詩を読む」コーナーに対して、二つの仕掛けをしました。一つは、その時まで開封しないでとお願いしたこと、そして、もう一つは、詩人の名前を伏せたことです。オンライン例会を終えた今は、なぜわたしがそのような仕掛けをしたかは、みなさんわかってくださったのではないかと考えています。どちらも、まったく素になって詩に出会い、そこに連なっている言葉だけを頼りに、繰り返し読みながら、詩を味わってほしいと考えたからです。

ただ、詩人の名前を伏せたり詩の一部分を隠したりするということは、読み方としては邪道です。詩はまるごと読むもの、まるごとを味わうものだからです。けれども、この詩の場合はゆるしてもらえると考えたのです。それは「自己紹介」という内容だったからです。自己紹介は初対面の者どうし、自分のことを相手に伝える行為です。だったら、詩人の名前がわからないほうが自己紹介の内容に心が向くのではないかと、そう思ったのです。案の定、Cさんも、他の皆さんも、この人は誰なのかにかなり注目されていました。けれども、私は、最後までそれは明かさなかつたし、皆さんもしばらくするとそれはそれで置いておいて、次第に自己紹介の中身に吸い寄せられていったようでした。

とは言いながらも、詩の読みはすべて皆さん任せにしていたわけではありませんでした。もちろん、ここはこういうふうに読んでください、というようなことは一切話しませんでした。けれども、皆さんのほうから、Cさんも書いておられるような「この人はどういう人なんだろう、どういう人生をおくってきたのだろう、どういう気持ちでこの詩を書いたんだろう」という思いがあふれてきたことを受けて、2度目のグループに際して、次のようなお願いをしたのでした。

「皆さんはたくさん気づきをしてくださっています。そこで、お願いなのですが、それらの部分部分の気づきをつないで、この詩を書いた“人”について考えてみてください」と。

この部分と部分をつなぐということについては、Aさんも7つの項目の最初に掲げてくださっていますが、そうすることで、この人の自己紹介をまるごと受け取ってもらえる、そして、詩をまるごと味わってもらえる、そう思ったからでした。詩や文学は教えられるものではありません。自ら味わうものです。それには何度も言葉に触れること、他者の読みに触れ学び合うことです。Cさんの文章は、そのことの真実さを感動的に表現してくださったのです。

Cさんは、最後に、「子どもたちにもこんな体験をしてほしい、と心から思いました」と書いておられます。私もそう思います。コロナ禍であろうと、感染症対策下であろうとも、子どもたちが、学ぶ喜びを味わえるような授業を提供するのは私たち教師の役目です。

それには、教師に何が必要なのでしょうか。私は講演で、「学び合う学び」は「何を学ぶか」と「どういう意識で学ぶか」に裏打ちされたものでなければならないと言いました。Cさんが書いておられるのは、まさにその「何を学ぶか」と「どういう意識で学ぶか」ということではないのでしょうか。こ

の例会で、ある人が「すべては学びを止めない教師の決心なのだ」とおっしゃいました。それは、優れたテキスト・課題(何)を準備し、すべての子どもが取り組む(どんな意識の)学びにするという決心です。詩を読む皆さんの体験が、その決心につながってくれたらこんなにうれしいことはありません。

ところで、私の講演から、そして、グループで語り合ったことも含むこの例会全体から、「つながり」ということの大切さを感じてくださった人がいました、Dさんです。

## Dさん

私は、この4月に学校を異動し、(休校中の)4月5月と、(初めて出会う子供たちは)どんな子供たちなのか想像しながらの課題づくりや電話連絡の日々でした。

6月、やっと会えた子供たちは、学校が始まった期待感と繋がりが無いクラスの友達と新しい先生に戸惑いを感じているようでした。

そんな中、初めは机を離して全員前向きの授業をまじめにわたしもしていたのですが、「分からない」と言えない孤立した子、取り残されていっている子、この子には支えが必要だという子などが見えてくると、自分もそんな授業がしんどくなってしまいました。

プリントに書いて、分からない所を交流し合ったり、椅子だけ一瞬向き合ってペアやグループできき合うなどしてみました。

全員前向きより、いささかましでしたがやはり物理的な距離(机の距離)は心の距離や壁になり、ただでさえ「分からない」を言うことが大きな壁なのに、この子こそ言えるようになって欲しいと思う子ほど、机の距離を飛び越えて「分からない」「どうするの」がなかなか言えない状況でした。

机をぴったりつける意味を再確認しました。

そんな時に、教育委員会から例示として時間を限定ではあるものの、今日の(講演の)写真にもあった真ん中を四角に開けて机を離れたグループの形があがっていました。それを取り入れると、授業が始まると子どもたちは自分たちでその机の形にするようになっていました。

その姿を見て、「子供たちは、繋がりがたかったんだな」「繋がるのが嬉しいのだな」と改めて思いました。(授業自体の深まりがあったかどうかは、まだまだなのですが・・・)

友達の話を知りたくて、立ち上がって友達の机に気が付けば接近していたり、フェイスシールドもつい立てもなかったりなのでこれがBESTではないのですが、今日お話を聞いた

「子供たちにとってこの学年は二度とない。そのために今できることをしていく」ということを心をもって、模索していきたいと思いました。

今回のコロナ禍でひしひしと感ずるのは、これまで当たり前のようにグループやペアができていたことがこんなに、貴重で重要だったのかということです。

「つながる」大切さを改めて感じています。

今回のオンライン例会に参加させていただき、本当によかったです。

「開封しないでください」という手紙のドキドキワクワク感。

家において、遠方の多くの方と繋がり、話をうかがうことができた繋がり感。

ランダムに組まれるグループで「誰とグループになるのだろう」という期待感。

今日のオンラインで石井先生をはじめ多くの方とつながれたのは貴重な時間でした。

ありがとうございました。そして、何より「2学期、またやってみよう」という元気が湧いてきました。長文になり、失礼をいたしました。

Dさんは、「子供たちは、繋がりたかったんだ」「繋がるのが嬉しいのだ」と感じたと書いておられます。たくさんのお子ともたちと出会ってきた私の経験から言っても、それは、Dさんの言うとおりの、ほとんどの子どもの真実の思いだと思います。

教室によっては、一向につながろうとしない子ども、無表情になっている子ども、聞くことができずただ自分の思いだけでさわぎ立てる子どもがいることがあります。そういった子どもも、自分では気づかない心の奥底で、「つながり」を欲しているのだと私は思います。その思いが、何らかの原因で閉ざされているのです。子どもに向き合う私たちは、たとえ子どもの状況がどんなものであろうと、そう考えて子どもに接していかなければならないのです。もちろん、すさんだ状況の子どもと向き合うには大変なエネルギーを要します。彼らの心の奥底にあるものを目覚めさせるのは並大抵のことではありません。しかし「つながる心」は眠っている、そう信じることから始めるしかありません。

Dさんは、今回の例会に参加される前から、「つながり」ということへの意識を抱いておられたのでしょう。「つながり」の大切さを心に持っておられたのでしょう。だから、この日の例会で感じられた「つながり」が心地よかったのでしょう。さらに、この日の例会で耳にし、目にした様々な事例からも、その「つながり」の存在を実感されたのです。「例会の時間が貴重だった」というDさんの思いは、そういうところから生まれてきたものにちがいません。

Aさんは箇条書きの最後に「対話が重要である」と書いてくださっています。その「対話」は「つながり」と深くつながったものです。対話があるからつながるのであり、つながりを大切にするから対話が豊かになるのです。

「学習の遅れ」を取り戻すため余計なことはしゃべらせず黙々と勉強させる、飛沫汚染をさせないために話をしないようにする、そうすることで「対話」も「つながり」もなくされてしまったら、人は人として健全には生きていけないのではないのでしょうか。

お読みいただいた4人の方のメッセージは、私から依頼して書いていただいたものではありません。それぞれの方がご自分の意思で私に届けてくださったものです。きっと、そのときの思いを、伝えずにはいられなかったからそうされたのでしょう。

私は、今、こうした思いや感慨が、オンラインで行うという状況で生まれたことに驚き、感激しています。人と人とが直接会って語り合い聴き合うのではなく、ラインを媒介にするのですから、そこにはどこか遠さとか不自然さとかが生まれ、遠慮が生まれ、上辺だけになったり、建前で物言いになったりして、つながり合えず、もどかしさだけが残るのではないかと危惧していました。

そうではなかったのです。

グループで語り合う皆さんの様子を横から眺め、皆さんの協議に耳を傾けながら、皆さんが、まるで目の前で向き合っているかのようなやりとりをしておられると感じ始めたとき、私は、オンラインでもこういうふうになるのだと感動していました。

そのとき私は、人と人とのつながりは、直接対面であるかオンラインであるかの違いによるのではなく、その他者と向き合う私たちの心の持ち方なのであり、目的なのであり、対話することへの期待と願望の深さから生まれるものだと感じました。

今回の「オンライン例会」は、私たちが以前から「学び合う学び」の核だと考えていた「対話」と「つながり」が、授業上のことだけでなく、人として生きていく上での核であるという気づきをもたらしてくれたのでした。

### 3. 生きるうえで、学ぶうえで、「つながり」は欠かせない

講演の後で行った協議の際でした。参加者のEさんから私に次のような質問がありました。

「先生の著書で『連続発言』というのが書いてあって、それをやっているのですが、うまくいかないの、どういうことなのかお話ししていただけませんか」

例会の時間の関係で、この質問にお答えすることができなかったので、ここに記しておきたいと思います。

Eさんが読んでくださっていたのは、17年前に著した『聴き合う・つなぐ・学び合う』です。そこで私は、教え込む一斉指導型から脱却し、子どもが発見する「学び合う学び」に授業を転換することの大切さを記したのです。その書のことがここで登場したのには驚かされましたが、その一方、そんな以前の自費出版の書が未だに読まれ活用されていることにありがたさを覚えました。

「学び合う学び」では、子どもの考えが学びの中心になります。そして、子どもたちは互いの考えを聴き合い突き詰め合って学びます。そうなったとき、子どもたちは、教師がいちいち言葉を挟まなくても、互いの考えに耳を傾け、その考えに対して次々と考えを述べるようになります。それは、現象的には子どもたちの発言が連続していくという状態です。そういう授業が当たり前のようにできる学級にするための、初期的な取り組み方として述べたことでした。

このことについてEさんの質問にお答えするうえで、どうしても最初に述べておかなければならないことがあります。それは、「連続発言」は、どうやって子どもたちを連続して発言できるようにするかを目的にして行うものではないということです。そういう考えで実施したら、必ず失敗します。発言することが目的になると、何のために考えを出すのかという意味がなくなるからです。

教師がいちいち口を挟まなくても、子どもの考えが連続して出てくる、それは、仲間の語ることに對して自分の考えをつなぎたくなるからです。考えの連鎖が子どもと子どもの間に生まれるからです。

そうなれば、子どもたちの意識は、発言しなければということよりも、仲間の考えを聴き考えることの魅力に向いていきます。つまり、「連続発言」は、連続して発言させるだけの取組ではなく、「聴くこと」「聴き合って考えること」への魅力と意欲を生み出すためのものだと言えます。

子どもの意識を、発言することよりも聴くことに向けるには、子どもよりも前に、教師に「子どもの考えを聴きたい」「子どもの考えはどんなものでも素晴らしい」という意識がなければなりません。間違っても、自分の言わせたいことが出てくるのを待つ待ち方をしてはなりません。教師がそういう気持ちでいると、子どもは言わされていると感じるし、考え気づくことの喜びが感じられなくなり、安心して発言できなくなるのです。

このように考えると、「連続発言」の「連続」とは「つながり」ということだとわかってきます。発言と発言に脈絡がなく、それぞれの思いつきを言うだけの発表、そういう連続は羅列でしかなく、私の言う「連続発言」とは異なります。もちろん、取り組み始めには羅列的になることもあるでしょう。けれども、なぜ「連続発言なのか」という意味がはっきりしていたら、次第に羅列ではない「つながり」のある「連続」に育っていくことでしょう。

私たちが教室で行っている「学び合う学び」は、学びを一人ひとりに分断しないで、わからないこ

とがあつたら尋ね、尋ねられたら寄り添い、難しい課題にはともに知恵を出し合い、困っている人がいたら支え、支えられることによって諦めず学び続ける、そういう「つながりのある」学びです。「連続発言」もそんな「学び合う学び」の一翼を担う取組なのだと考えなければなりません。

そこまで考えて、ふと、この「つながり」ということが、今回の「オンライン例会」でもっとも重要なこととして浮上していたことを思い出しました。授業づくりを学びたい人たちが集い、双方向に語り合い聴き合って互いに育ち合おうとした3時間半を貫いていたのは、70人の皆さんの「つながり」だったとしみじみと思います。

教室で子どもたちを対象に行っている営みも、私たちの会で一人の教師として学んでいる営みも、根本にあるものは共通しているのですね。そこにあるのは、人が人として生きる姿そのものなのでしよう。

「つながり」は、人生においてなくてはならないものです。私が17年前に著した『聴き合う・つなぐ・学び合う』という書の書名、それは、その当時から、「つなぐ」ということが、私の理念の核心を占めていたことを表しています。

その「つながり」が、コロナ禍でピンチを迎えているのです。感染症のことだけに心を奪われ、とにかく人と人の距離をとること、飛沫が飛ぶから話を控えること、学校では席を離して全員前向きで先生の指示通りに学習することというふうに徹底している学校があるとしましょう。それらのことは感染症対策として間違いではありません。しかし、それだけをあまりにも厳密に、他のことを犠牲にするようにやらせてしまうと子どもに精神的な負担をもたらすこととなります。そうして子どもにとって大切な「つながり」が犠牲になって絶たれてしまう、それは由々しきことです。

もちろん、感染症対策を欠いてはなりません。しかし、そのことで子どもの「つながり」を切ってしまうてはならないのです。そうではなく、感染症対策をしながらも、どうすれば「つながり」をなくさないようにできるかと考え実践しなければならないということなのです。子どものこと、人としての成長ということにしっかりと目を向けている教師なら、そう考えるはずです。決して、感染症対策だけ指示される通りにこなすというようなことにはならないはずです。

話を質問してくれたEさんに戻しましょう。Eさんがどのように取り組まれていたのかはわかりません。ですから、具体的なコメントはできないのですが、発言させることよりも前に、「聴くこと」「つながりを大切にすること」が浮き出るような取り組みをされたらどうでしょうか。前述したことです。私は、講演で、「学び合う学び」を生み出すとき次の三つが揃わないとだめなのだと言いました。「何を学ぶか」「どういう意識で学ぶか」「どう学ぶか」の三つです。「連続発言」が発言を連続させるという「どう学ぶか」だけになったらそれでは本物にはなりません。そう考えてもらえればよいのではないのでしょうか。

コロナ禍の今、どのようにして人と人との「つながり」をなくさないようにするか、それ以上にどう築いていくか、それには、Cさんの「コロナ禍でひしひしと感じるのは、これまで当たり前のようにグループやペアができていたことがどんなに貴重で重要だったのか」という思いを忘れないことなのだと思います。オンライン例会は、私たちに「つながる喜びと大切さ」をもたらしてくれました。だから、Aさんが、「なんとという贅沢な時間だったか!」と書いてくださったのでしよう。